

『現代 TOKYO 怖話』

—Side B

シナリオ版

1
脱毛エステ・更衣室

ユニフォームを羽織り、眼鏡を外し、ネームプレートを付ける。

ユニフォームの胸元に、『Go in beauty高橋あすみ』のネームプレート。

2
脱毛エステ・会議室

社長の黒木が朝礼でエステティシャンたちを前に檄を飛ばしている。

黒木「ウチはね、人気も知名度も実力もないんだから、大手と

同じようなことしてちゃ意味ないんですよ？ 押して押

して押す！ ゴーイン、ゴーイン、ゴーイン、ゴーイン ビューテ

イ！」

高橋「(つぶやくように) ゴーイン ビューティー！よし！」

高橋あすみが真剣な表情で聞いている。

黒木「わかる？ できないちゃん」

周囲はいっせいに高橋を見る。

黒木「高橋！」

高橋「…はい！」

黒木「今日のノルマはいくら目指すの？」

高橋「えっと…」

黒木「あー！ もう！ ちゃんと責任もってクリアしてくれないと、店だつて潰れちゃう。みんなだつてインセンティブ入ってこない。誰もハッピーにならないじゃない？」

高橋「はい」

黒木「今日、高橋がひとりも契約とれなかったら全員ペナルテ

イだから」

先輩たち「え？」

黒木「できないちゃんにセールストークを叩きこんでよ」

先輩エステイシャンたち、冷たい目で高橋をにらむ。

その目に耐え切れずにうつむく高橋。

タイトル『現代TOKYO怖話』

3
脱毛エステ・カウンセリング室

強張った笑顔で接客ロープレをする高橋。

高橋「初めまして。担当の高橋です」

冷たい目つきでロープレを指導する先輩の三枝、小

山、和泉。

三枝「だめ。もっと心の距離を縮めて」

小山「『高橋です』とか、抑揚つけてみたら？」

高橋「高橋ですう〜」

和泉「経験も自信もないのバレバレ」

高橋「すいません」

和泉「もうさ、あははははは！ って突然笑ったりしちやっ
たらどう？」

小山「とにかくこっちのペースに巻き込んで、冷静な判断をさせないことだよ」

高橋「なるほど…」

和泉「体験客が来たら、「うわぁ」とか「これはひどい」とかって言つてとにかく混乱させるの」

小山「そうそう。コンプレックスは徹底的に突つつくこと」

高橋「でも、それじゃ…お客さんが…」

小山「いいの。だいたい1000円で脱毛し放題なんてありえないんだから。それ目当ての客なんて、客じゃないよ」

和泉「こんなキャンペーンじゃ完全に赤字だし」

高橋「…そうですけど…」

三枝「で、クロージングのポイントは、お得だと錯覚させること…」

小山「月1万のリボ払いならワンピース一枚買うのと同じ！
とか」

三枝「はい、じゃあテスト。提案するコースの順番は？」

高橋「高いコースから安いコースへ」

脱毛エステ・店内

三枝「お金がないと言われたら？」

高橋「すかさず分割を提案」

三枝「必殺技は？」

高橋「期間限定！ 初めての方限定！」

和泉「アーンド？」

高橋「今日、この場でお申込みいただいた方限定！」

三枝「そう。限定の三段活用ね。日本人はお得と限定に弱いか

ら」

和泉「イイじゃん、高橋い。やればできるじゃない」

高橋「(少しうれしそうに)ありがとうございます」

おどおどとした表情でさとみが入ってくる。

扉が開き、別人のように堂々とした立ち居振る舞い

で、高橋が出迎える。

高橋N「私ならできる、絶対できる、ゴーイン、ゴーイン、ゴー

インビュートイー」

高橋「本日担当させていただきます、高橋です」

さとみ「ど、どうも…」

× × ×

必死に勧誘している高橋の姿。

高橋N「正直、細かい記憶はないけれど、自分でも驚くほどにう

まくやれた気がする」

× × ×

疲れ果てた表情で契約書を受け取る高橋。

先輩たちがあらわれてハイタッチ。

高橋N「この喜びは、地獄の始まりだった」

脱毛エステ店内

「客を逃すな！」と書かれたホワイトボードの前で

檄を飛ばす黒木社長。

黒木「目の前を魚が泳いでいるのに、釣り糸を垂らさない釣り

人がいますか？」

高橋 N 「ノルマはどんどん厳しくなり、お客さんには次々と別のプランを提案。高い化粧品も売りつけた」

× × ×

電話越しに頭を下げる高橋。

高 橋 「…失礼いたします」

高橋 N 「クレーム電話は日常茶飯事」

電話を切り、受話器の横に置かれた自分宛ての封筒を机の上を開ける。

高 橋 「……」

中には折れたカミソリの刃数枚が。

高 橋 「……」

再び電話が鳴り、

高 橋 「もうし……」

向こうから電話が切られる。

高 橋 「…わけありませんでした……」

電話口に深々と頭を下げる高橋。

街中

高橋 N 「先輩たちもどんどんと辞めていった…」

去っていく、三枝、和泉、小山ら先輩社員たち。

高橋 N 「私も、もう耐えられなかった」

清々しい笑顔で歩く高橋。

高橋 N 「私は、別の新しいお店で、エステティシャンとしての人
生をやり直している」

エステ店の看板を見つめ、

高橋 N 「私たちのように、悲しい思いをする人が、これ以上出ま
せんように…」

高橋 「……」

その看板には『エステサロン Beating You』と書か
れている。

再び店内へと歩き出す。

そこへ一人の足元が…。

そのまま高橋の後を追い…

エステティシャンとして働く高橋が客を待ち受けて
いる。フードを被った女性が店内へと入ってきて、

高橋「……」

フードを取ると、

さとみ「……」

終